

近世期出版文化に於ける日用類書の研究 ―「重宝記」序文から得られる考察―

小野さやか

要旨 日用的な生活知識を扱った重宝記は、その内容が多岐にわたるため、それぞれ個別に研究されることはあつたが、「重宝記」というひとつのまとまりとしての全体像が研究されることはなかった。そこで、重宝記の序文は、その内容を要約し読者に紹介したものが主である点に注目し、序文を見ることで重宝記という膨大な量の書物の一片でも解明させることを目的として本稿に臨んだ。重宝記序文の書名に関する記述や、序文の変遷、原本と改刻本それぞれの序文の比較などを論じ、そして、重宝記という様式が元禄年間から出版され続けるのは、重宝記が持つ独特の序文形式の中において、ある大義を挿んでいくことができたことが一因となっているのではないか、という結論に達した。

一 はじめに

近世において出版文化が著しく発展したのは、周知のとおりである。鈴木俊幸氏は『近世書籍研究文献目録』（ペリカン社、一九九七年）の中で、現在から近世の書物等を研究する為に可能と考えられる分類を行っているが、その中に「重宝記」というジャンルを成立させている。重宝記は庶民の生活日用知識の百科辞典などといわれ、雑種雑多多岐に亘る内容を題材として取り扱い、江戸時代全般を通じて出版され続ける書籍である。しかし、鈴木氏による『近世書籍研究文献目録』以前、重宝記は一つのまとまりとして、広義の意味での研究をされる事はなかった。それは重宝記一冊毎の内容が多岐にわたっていたことが一因である。従来の書籍を内容による分別の仕方では「重宝記」という一まとまりは成立しえなかつたのである。例えば、『女重宝記』¹と『牛療治重宝記』²は、内容による分別では同じまとまりとは考えられにくく、もし仮にこれらの重宝

記を分類するならば、一冊一冊ごとに振り分けられて考えられていたのである。それは研究史についても同様であり、『女重宝記』『嫁聚調法記』³などは女性学で、『農家重宝記』⁴『紙漉重宝記』⁵などは歴史学や民俗学の方面で、『童子専用寺子調法記』⁶などは往來物の一つとして、個々別々に研究が進められていった。それぞれ個々に研究されていた重宝記を、「重宝記」というまとまりでまとめていくのが、長友千代治氏である。長友氏はその著作『江戸時代の書物と読書』（東京堂出版、二〇〇一年）の中の「第三章 読書知識と書誌 重宝記さまざま（江戸若者心得の本）」に、二十種の重宝記について言及しているが、文学界における「重宝記」への認識を、『日本古典文学大辞典』による「重宝記」を参考として記述を引用しておく。

重宝記 ちようほうき 近世を通じて出版された「重宝記」と題する日常生活の必要常識を集成したハンディーな啓蒙書の通称。「調法記」「重法記」「調方記」なども書く。【沿革】(略) 【特色】内容は、それぞれの分野別に、平易に要点を解説したもので、当代の一般常識を大観するのに好適な書物である。ただし、先行文献の無断借用が多く、それを糊と鉄とで手軽に編成した傾きがあるので、使用には注意を要する。元禄前期に多く刊行されたのは、同趣の「訓蒙図彙」「大全」「全書」などと題された文献と同様であるが、その部数は「重宝記」の類が一番多い。また、三切本(みつぎりぼん)・横本の書型が多いのも一特徴である。【付記】(以下略)

〔前田金五郎・花咲一男〕

重宝記に扱われた内容は、医学、農学、文書例、算術、字書等といった、近世における日用的な知識を取り扱った辞典的な役割をもつ。そのために重宝記は現在において、近世から近代初頭に出現した様々な文芸作品における研究や考証のツールとなっていることも確かである。しかし、あくまで「辞典的な役割」である重宝記の情報に、我々がどの程度信頼を寄せれば良いのか、重宝記自体の研究が進んでいないがために、その情報の確実性を保証されたものであると、安易に判断を下すことはできないのである。

稿者は、この重宝記を研究する事を博士課程における最も重要な研究テーマと位置づけている。重宝記の序文はその重宝記の内容の紹介文であることがほとんどである。今回、重宝記の全体像をつか

むためには、その序文を読むことがもつとも適切であると考え、序文を持つ重宝記に注目した。重宝記の様式を考えた時、その書名に拠る以外に何かあるのかを考えていきたい。

なお、今回本稿において参考にした序文の有る重宝記は、以下のとおりである。『昼夜重宝記』元禄三(一六九〇)年、『医道日用重宝記』元禄五(一六九二)年、『女重宝記』元禄五(一六九二)年、『男(なん)重宝記』元禄六(一六九三)年、『金持重宝記』元禄七(一六九四)年、『世話重宝記』元禄八(一六九五)年、『諸人重宝記』元禄八(一六九五)年、『永代重宝記』元禄八(一六九五)年、『嫁聚調法記』元禄十(一六九七)年、『呪詛(まじない)調法記』元禄十二(一六九九)年、『男女土産重宝記』元禄十一(一六七〇)年、『陰陽師調法記』元禄十四(一六七二)年、『船乗調法記』寛延元(一七四八)年、『田畑重宝記』延享五(一七八七)年、『牛療治調法記』宝暦六(一七五六)年、『増補呪詛調法記』安永十(一七八二)年、『永代重宝記(増補)』天明七(一七八七)年、『絹布重宝記』天明九(一七八九)年、『遊里不調法記』寛政六(一七九四)年、『紙漉重宝記』寛政十(一七九八)年、『方角重宝記』文化元(一八〇四)年、『胡椒一味重宝記』嘉永七(一八五四)年、『台所重宝記』明治三十八(一九〇七)年の二十三種の重宝記。

二 序文から得られる考察

二・一 重宝記の書名表記について。 「重宝記」

「重宝記」という書名について考えてみたい。重宝記はその書名表

記が様々にあり、「重宝・調法・重法・調宝」といった具合に、近世人特有の文字感覚で外題や序題、内題、目録題、尾題などに様々な漢字を当てている。当時の人々にとって、その書籍を指すときに「ちようほう」と発音することが重要なのであり、実際に「調法記」などと表すものも多い。その中でジャンル名として「重宝記」が採用され確立していく理由として、『家内重宝記』元禄二（一六八九）年が、重宝記の最初の本であることが『元禄大平記』元禄十五（一七〇二）年において紹介されているために、この『家内重宝記』の「重宝」を祖として、後の「調法、調宝、重法」が派生していったものであるためと考えられる。重宝という語には「役に立つ」という意味があり、実際、生活においてこれらの重宝記は役に立ったのであろう、と容易に推測できる。重宝記の序文には何度か「重宝」が使われており、その部分を参考にする。

『昼夜重宝記』「…懐中本有當用節事誠に世の重寶たり…」

『男重宝記』「…世の重宝として梓に鏤め摺写する事いとまなし…」

『呪詛調法記』「…梓にちりばめ世の調法となす物也…」

このように、専門的な知識を世の中の宝として刊行する、という気概ある書名であることがわかる。

二・二 重宝記の書名表記について。「調法」

「調法」という言葉は『饅頭屋本節用集』では「法語」の項で分類をされている。「調法記」と銘を打つことで、表題が「法語」であることを意識的に考え、他の「重宝記」と区別をしていたと考えられることができる。『呪詛調法記』（森岡貞久作、書林米川、京森岡

貞久板、元禄十二年（一六九九）年刊）の序文を参考にしあける。

『呪詛調法記』

呪詛調法記 序文

それまじないといふ事天ちく国に疫病はやり万民枕をならばなやみくるしむしやかによらい是をふびんに思えきをんしやうじやにて経文をとなへまじない唱ふにたちまち疫病さつて一人も残らず皆本ぶくして随喜の涙をながす諸病にかきらず万物の事まじなひまで成就せんといふをなしそれより我朝に伝り神道にも仏道にも是を行はきどくある事甚きめう也今此一冊予が家の秘書也といへども我一人の宝とせんはむげなりと思ひ梓にちりばめ世の調法となす物也あなかしこ世ハまじないなればしんくをこらし給はゞ其きとくならんや

ここで出てくる傍線部の「調法」は本来ならば「重宝」とするべきところである。しかし、あえて節用集などで法語と認識されている「調法」を用いたのは、この序文において、疫病本復のまじないの祖として釈迦如来を挙げていること、つまり法語との関連をつけるためと考えられる。そこでその他の病氣本復に関する、つまり医療関係の内容をもつ重宝記の題名についても調査を行った。すると、確認できた病氣本復に関わる十六種の重宝記のうち、その中で特に書名に「調法」を使ったものは以下の通りである。

『呪詛調法記』『陰陽師調法記』『小児療治調法記』『牛療治調法記』『馬療調法記』、『増補呪詛調法記大全』『改補外科調法記』、『新撰呪詛調法記大全』『酒造肝要調法記』。

また逆に、「重宝」を使ったものは、以下の通りになる。『医道日用重宝記』、『薬店手鑑薬種重宝記』¹⁰、『骨継療治重宝記』¹¹、『外科重宝記』¹²、『図解大全鍼灸日用重宝記』、『萬家重宝呪詛伝授袋』¹³、『齋民外科重宝記』¹⁴。

以上のように病氣本復に関する重宝記十六種のうち、「調法」が九種、「重宝」が七種となった。この数字は現段階で確認できた八十種の重宝記中、割合から考えると、実に「調法」と書名を打っているものの半分近い数が医療関係の重宝記で占められており、かなりの割合をもっていることが発見できる。この『呪詛調法記』も序文にあるように「諸病に限らず万物の事、まじなひまでも成就せんとあり、この重宝記の内容が、疫病本復を始めとして様々な物事をまじないによって成就解決する内容であったところから少々宗教色の濃いものになったために、法語としての「調法」を意識的に使ったと考えられる。

しかし、「調法」という字を、まじないや医療に関する内容と関連性を持つて意図的に題名につけたと言いつてしまふにはまだ問題は残っている。広告にて宣伝されている医療系の重宝記には「重宝記」という表記が多く見られ、さらにさまざまな重宝記の調査が必要と思われる。

二・三 「重宝」という語の由来と解釈

書名の由来を探るために再び重宝記の序文に注目をしてみる。最も有名な重宝記の一つに元禄五(一六九二年)『女重宝記』があり、後印本や改刻本が多く刊行されたこの重宝記の序文に注目してみる。

『女重宝記』序

一筆とりむかひ被参候つれ、草に女の性は皆ひがめり人我の相ふかく貪欲甚しく物の理をしらず直ならずして拙ものは女なりと兼好法師もかゝれ申候又唐には金玉寶とせず善をもつて寶とすと大学にも御座候よし今この五冊のさうしに女の善をのべあらわしてかのひがみを揉なをし女のおぼへてよき事を書あつめてかの拙を直ならしめ申候よつて外題を女重宝記となづけ参らせ候かしこ 艸田寸木子叙

この『女重宝記』の序者である艸田寸木子なる人物は、この号に使われている文字を合わせて「苗村」と読むこと、つまり、苗村丈伯なのであるとすることが、太田栄太郎氏「苗村丈伯の略伝―男重宝記と浮世鑑との比較―」(『書物展望』、十卷十一号、一九四〇年)に見られる。この『女重宝記』は非常に売れた事がその次の年に刊行された『男重宝記』の序文にも見る事ができる。

『男重宝記』

男重宝記序

書林某来りて嘆美して曰余が嚮に作れる女重宝記五冊は世の重宝として梓に鏤め摺写する事いとまなし希は是に對して男重宝記を作れと當時重宝記と題する書十有余種あり今その醜を歎て先人の糟粕を舐も嗚呼がましければ先書になき事どもを余が若年の比より聞おぼへたるまゝに書あつめ童男の知て重宝とす

るもの也大人男子のためにするにあらず 元禄六年癸酉林鐘日
 艸田子 三徑題

このように『女重宝記』の轍を踏んだことが伺われる『男重宝記』であるが、当時の重宝記人気を存分に知ることができる。他の重宝記作家が『女重宝記』を読み、その影響を序文という場の中で表してもおかしくはない。

『女重宝記』の序文は『徒然草』「つれ／＼草に女の性は皆ひがめり人我の相ふかく貪欲甚しく物の理をしらず直ならずして拙ものは女なりと兼好法師もかゝれ申候」と『大学』「唐には金玉寶とせず善をもつて寶とすと大学にも御座候」とを引用している。『大学』のこの部分を引用した序文を持つ重宝記、つまり『女重宝記』の影響があると考えられる重宝記に『永代重宝記』元禄八（一六九五）年刊がある。

『永代重宝記』¹⁵
 序

古語に曰楚國は以て寶と為すこと無し唯善を以て寶と為（以上、稿者による書き下し文）となんこれ道は金玉より重きことを君子教誡し給ふかけまくもかたじけなき御式目は忠孝の道を擴く民に施し給ふ御恵は筑波山の陰よりもしげく仰ば高き理を邊鄙童蒙のために知しめんと今此書の角に冠しむ殊に身を終るまで日々に謹で目に觸るときは五倫の正しき徳にすすみ其身を潤し侍らむことを金玉よりも重き寶なるかなしかればその福を子孫に傳てなかく保んときはこれまた永代重寶記なるべしとい

ふこと尔り 元禄八年乙亥孟春吉辰 洛下 隱士 一敬子謹言

『大学』 「伝八章」

康誥に曰く、惟れ命常に干てせずと。善なれば則ち之を得、不善なれば則ちこれを失うを道う。楚書に曰く、楚國はもつて宝と為す無し、惟だ善をもつて宝と為すと。舅犯曰く、亡人もつて宝と為す無し。親を仁するもつて宝と為すと。

【通解】康誥にいわく、上天の命は、去留常なく、決して一定しないものである。これは人君の一念善なれば天命を得、一念不善なれば天命を失うことをいっただものである。さればこそ楚書にも、王孫圉が晋の大夫趙簡子に答えて楚國は珠玉をもつて宝とせずして、有徳の善人をもつて宝とすといっただのである。…（後略）¹⁶

この『大学』 「伝八章」は、『大学』が掲げる三綱領（明德・新民・止至善）八条目（格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下）の中の、特に修身齐家について述べられている章であるという。宇野哲人氏の伝八章の第一文の「通解」によると「右は伝の八章で、身を修め家を斉（ととの）うることを解釈したものである」と説明をされている。その修身齐家の章において範とするべき歴史的人物として『楚書』から王孫圉の態度が評価されている。この王孫圉の言葉を『女重宝記』は「金玉寶とせず善をもつて寶とす」と採用し、さらに『永代重宝記』は「これ道は金玉より重きことを君子教誡し給ふ」と述べ、善（道）は金銀玉石よりも重い宝なので

ある、と説いている。重宝記は、庶民生活の「役に立つ」ことを期待された書籍であるがために「重宝」記と名づけられているのであるが、『大学』『伝八章』に見られる楚人の王孫圉の逸話に出てくる「宝」を引いて、「女の善をのべあらわしてかのひがみを揉なをし女のおぼへてよき事を書あつめてかの拙を直ならしめ申候」と、ひがみ、拙きを善に直す(修身)こと、それが家に秩序をもたらす(齊家)と『女重宝記』において解釈し、それが「金玉よりも重き寶なるかな」と『永代重宝記』で重宝記の目的としたのである。『女重宝記』からの影響が見られる『男重宝記』『永代重宝記』(元禄八年本、宝暦十年本、天明七年本)、『多入女重宝記』などの多くの重宝記は、この『大学』による終身齊家治国平天下の理想に基づいて作られていることが窺われるのである。

『官許假名讀新聞 第六號 明治八年十一月十一日¹⁷火曜日』

世間の娘五娼妓芸妓衆耳を穿つてお聞なさいよ失敬ながら普通の女達は胸に学問といふ句讀がないから愚痴といふ病ひが募り自己の不出かしは棚へ揚げ他人を怨み新聞紙に出れたから悔しいのと前後看ずに逆上あがりて情死するの首を縊るの海川へ身を投げるのと不了簡な野郎を誘ひ或は刃物三昧で他人様や親達の心配のみか政府へ五苦勞をかけるといふはマア何たる耻の上塗で有ませう馬鹿も大概程のある物新聞やが人の症氣(ママ)を頭痛に病も如何して姉さん達を利口にして心得違ひを矯め直し正しい道に進みたいから憎まれ口も利のです。(後略)

仮名垣魯文監修の『假名讀新聞』は、新聞を仮名まじりの文章で

発刊し、女性や子供に大変喜ばれた新聞である事がその「寄書」欄をみてもよくわかるが、その第六號にこのような記事載せて、新聞屋が記事を書くのは娼妓芸妓衆が学問を知らないために罹った愚痴の病を治し、正しい道に進ませるためである、という『假名讀新聞』の存在意義を書いている。この文章の趣旨や、傍線部の表現など、『女重宝記』の序文からの影響が見られる。『女重宝記』よりも『假名讀新聞』が、具体的な内容を詳細に描いた理由としては、新聞という事件記事を扱う性格や、活字になつていてことにより多くの情報が少ない紙面で伝えられることを生かしたものであると考えられる。

三 重宝記の序文

三・一 序文の変遷

重宝記の序文を並べて一読したときに目立って見られるのが、重宝記を作る目的が「啓蒙」にあることを述べている文章である。また同じように見られるのが、この重宝記は「秘伝の書」である、と述べる文章である。「啓蒙」を目的に書かれている序文をA群、「秘伝書」の重宝記をB群にまとめた。

A

『医道日用重宝記』 「こゝに非家の初心のために醫道日用重寶記と号し浅きより深きにいたる問津の一書をなして傍邊の素生に便りせんとす」

『女重宝記』 「今この五冊のさうしに女の善をのべあらわしてかの

ひがみを揉なをし女のおぼへてよき事を書あつめてかの拙を直ならしめ申候よつて外題を女重宝記となづけ参らせ候」

『男重宝記』 「童男の知て重宝とするもの也大人男子のためにするにあらず」

『世話重宝記』 「この書を師として大人小子の人間の話言に誤ならしめん事を欲するもの也」

『諸人重宝記』 「善にはものうく。悪にうつりやすきは人情なり：愚なるきは」。馬耳風のごとくしてやみぬ。されは此書は世わたる中に。要となるべき事共をとり集めて一ト巻とし侍る。」

『永代重宝記』 「高き理を邊鄙童蒙のために知しめんと今此書の角に冠しむ」

『紙漉重宝記』 「小人閑居して不善をなすの語亘なる哉女子のいとまあらん事禍ひをまねくの門窮国の表示なるべし」

B

『呪詛調法記』 「今此一冊予が家の秘書也といへども我一人の宝とせんはむげなりと思ひ梓にちりばめ世の調法となす物也」

『男女土産重宝記』 「まことに千金にもかえつる珍書なりといへども家に秘して一人のたからとせんも本意ならねば梓にちりばめて男女の土産重宝となせる而已」

『船乗重宝記』 「予壮年の頃船に乘しに人あつて書をあたふこれは是不換千金の傳と拜してうけつら／＼見るに実に乗船の規矩たりしかれとも文かたく文字くとして語も又みたすいたづらに巻収むる事多年也元來捨置く事本意ならず」

『増補呪詛調法記大全』 「亦夕はレ修驗家ノ咒術ノ之俾益耳偶書家

携テ之ヲ以テ校正ヲ屬ス予ニ如キ予カ玄門ノ之逸民何ソ修驗道ヲシテ之ヲ識ンヤ耶」

A群の「啓蒙」目的を序文に明記してある重宝記は、主に元禄年中に刊行された重宝記に多い。つまり、重宝記の初期（元禄十年頃まで）に刊行されているものに多いという傾向が見られる。B群の「我が家の秘伝書」である重宝記は、少々時代がずれて元禄末（元禄十一年～元禄十四年）以降に刊行された重宝記であるといえる。

特に、『呪詛調法記』『男女土産重宝記』は同じ板元（森岡貞久）から年を追って刊行された作者も序者も明記されていない重宝記である。この二つの重宝記は、「一人の宝とせんはむげなりと思ひ梓にちりばめ世の調法となす」「一人のたからとせんも本意ならねば梓にちりばめて男女の土産重宝となせる」と、序文に使われる文言が近い。序文に板元である森岡貞久が関わっていたことが窺うことができる。

初期の重宝記に見られる傾向に、人が善であるために必要な知識を揃えた、いう啓蒙的な序文が目立つことである。また、この書は重宝だ（役に立つ）から「重宝記」と名づける、という書名に言及する序文が見られることは前の章で述べたが、それと併せて考えてみると重宝記はただの辞典というものではなく、元禄時代の人々の知的好奇心を積極的に刺激する書物であることを目指したものが重宝記であったようである。

元禄末以降の重宝記、特に森岡貞久が刊行した『呪詛調法記』『男女土産重宝記』『陰陽師調法記』には、その内容に若干の変化が見られてくる。それはつまり板元が提供する知識、又は読者が期待し

た知識の質に変化が見られたのだと考えられる。『船乗重宝記』以外のB群の重宝記の内容は、まじないや手品(のようなもの)、閨房術といった内容が混じっている重宝記である。これらの重宝記を読者が読む時に必要だったのが、「秘伝書」という言葉が持つ魅力であったのであろう。

三・二 改刻本の序文

三・二・一 『医道日用重宝記』の序文と諸本の解題

特に初期の重宝記は多くの後印本や改刻本を出す、同じ書名、内容でも後の板元によって序文と刊記だけを変えられる場合が多い。『医道日用重宝記』はその序文が二通りあり、それぞれが後印本を多く出している。この二つの序文を比較してみたい。序文の後ろにはその序文を持つ重宝記の解題をそれぞれ付けておいた。

A 『医道日用重宝記』(元禄五年版)

①それ醫道の聖神玄妙なる事浩浩としてそれ天地誰か得て其縦横をはかりつくさんこゝに非家の初心のために醫道日用重寶記と号し②浅きより深きにいたる問津の一書をなして③傍邊の素生に便りせんとすこれ④此書たるや始めには脈を診するの大法をのへて諸脈の状を顯はし主病を知生死を決し薬法は病門をわかち⑤病因を論し脈証を記し⑥寒熱虚實を弁じ⑦方を用る意をしるす又⑧加減の例を出して気血虚実風寒湿熱一切の諸証に由て加減の⑨要劑數種を記す又常□(一行欠) 処の⑩丸散練藥數品の名方をあげ及び⑪日用調菜の食性能毒并針灸の要穴を記し薬性は諸家の本草を抜粹

して気味能毒製法等⑫に至るまでくはしく是を記せるものなり誠に手裏小冊の中に許多の至宝を秘蔵せり心を用て且止ざる時は恰も忠孝をはけまし平生を利し立身の益をもとめずと云事なしよつて此書に題するの微意こゝに畢ぬ。

解題(元禄五年版)

底本 前田金五郎氏蔵本
書名 『医道日用重宝記』(序文に拠る)

「医道日用記」(目録題、内題、尾題)

刊年 元禄五年(一六九二) (刊記に拠る)

作者 不明

板元 京 上村平左衛門

江戸 万屋清兵衛

大坂 雁金屋庄兵衛

B 『医道日用重宝記』(享保三年版)

「(1)それ醫道の玄妙なること浩浩として測がたしここに醫道重宝記は片郷の庸醫あるひは醫道に志ある俗家のために(2)古人此書を著す(3)始には脈を診するの大法をのべ薬性の樞要を顯す中は(4)病因を論じ(5)寒熱虚實を辨じて(6)方をもちゆる意を記し并に(7)加減の例を出して(8)要劑數種を載せ又經驗の(9)丸散練藥の名方雜方をあぐ未に(10)日用調菜の食性能毒及び針灸の要穴あるひは五臟六腑の圖解(11)にいたるまで悉くこれを記せり誠に手裏小冊の中に許多の至寶を秘蔵し(12)傍邊の素生(13)あさきより深にいたる問津たり」但剗剛人を千にし模寫手を百にす肯て謬誤なきことあたはず僭踰なることをしるとい

へども止忍ず即これを校正し粗増益して書肆にたづく庶幾はこの書に頼て薬を用ゆる者の誤りならんことを欲す豈民を救ふ一助にあらさらん乎 峇 寶永己丑季秋吉日 浪華 芳菊堂本郷正豊 序 印 (芳菊堂)

解題(享保三年版)

底本 大方保氏蔵本

書名 『医道日用重宝記』(序題に拠る)

「医道日用重宝記大成」(見返し題)

「医道日用記」(目録題)

刊年 享保三年(一七一八)(刊記に拠る)

序者 芳菊堂本郷正豊

板元 京 菊屋七郎兵衛

江戸 萬屋清兵衛

江戸 小河彦九郎

大坂 柏原屋清右衛門

※見返しに「延壽切要 増補」

また、この享保三年版は序文をまったく同じくしているが板木の違う『医道日用重宝記』が文政元年に刊行されている。また、慶應四年の筆書きがある『医道日用重宝記』は、序文、刊記、奥目録等がない。享保版と文政版の違いは見返しを見ると一目瞭然である。

解題(文政元年版・寛政十二年版)

所蔵 名古屋博物館蔵・上田市立図書館花月文庫所蔵

書名 『医道日用重宝記』(序題に拠る)

「改製造補医道日用綱目」(外題、見返し題)

「医道重宝記」(目録題、尾題)

刊年 文政元年(一八一八)(刊記に拠る)

序者 芳菊堂本郷正豊

板元 京 菊屋七郎兵衛

江戸 須原屋茂兵衛

大坂 柏原屋清右衛門

※見返しに「長生寶藏 増補」

※上田花月文庫本に最終丁に筆書きで「寛政十二年」の記述があり同じ文であるが板木を彫り直している可能性が高いため「寛政十二年版」とする。

解題(慶應四年版(仮))

所蔵 上田市立図書館花月文庫所蔵

書名 『医道重宝記』(外題(筆書)、目録題、尾題に拠る)

「改製造補医道日用綱目」(外題、見返し題)

「医道重宝記」(目録題、尾題)

刊年 文政元年(一八一八)(刊記に拠る)

序者 芳菊堂本郷正豊

板元 京 菊屋七郎兵衛

江戸 須原屋茂兵衛

大坂 柏原屋清右衛門

※見返しに「長生寶藏 増補」

※題簽、序文、広告、刊記無し。

※後ろ見返しに筆書きで「慶應四年」とあるため、仮に慶應四年版

とするが、文政元年版の後印本であると思われる。

序文についてのみ注目してまとめると次のようになる。A『医道日用重宝記』(元禄五年版)とB『医道日用重宝記』(享保三年版)の二系統の序文があり、B系統には①享保三年版とi文政元年版がある。享保版と文政版の二つの序文は全く文言が同一であるが、見返しによる判別が可能である。文政元年版はさらにii寛政十二年版とiii慶應四年版(とi文政元年版)の三系等が現在確認出来ており、寛政版は序文があり文政版と文言が同じであるが、板木が違う可能性が高い。最終丁に「寛政十二年」と筆書きがある。最後の慶應四年版は序文、刊記がないが、見返しが文政版と同じものである。後る見返しに「慶應四年」と筆書きがある。しかし、板木に他のどの重宝記にも見られない癖があるため、彫り直されたと考える。

三・二・二 『医道日用重宝記』の元禄版と享保版(改刻本)の序文の比較

A『医道日用重宝記』(元禄五年版)とB『医道日用重宝記』(享保三年版)の序文をそれぞれ対応させ、元禄版と享保版の同一表現の部分を次に抜粋する。

(元禄五年版) ①それ醫道の聖神玄妙なる事浩浩として

(享保三年版) (1)それ醫道の玄妙なること浩浩として

(元禄五年版) ②浅きより深きにいたる問津の

(享保三年版) (13)あさきより深にいたる問津たり

(元禄五年版) ③傍邊の素生
(享保三年版) (12)傍邊の素生

(元禄五年版) ④始めには脉を診するの大法をのへて
(享保三年版) (3)始には脉を診するの大法をのべ

(元禄五年版) ⑤病因を論じ
(享保三年版) (4)病因を論じ

(元禄五年版) ⑥寒熱虚實を弁じ
(享保三年版) (5)寒熱虚實を辨じて

(元禄五年版) ⑦方を用る意をしるす
(享保三年版) (6)方をもちゆる意を記し

(元禄五年版) ⑧加減の例を出して
(享保三年版) (7)加減の例を出して

(元禄五年版) ⑨要劑數種を記す
(享保三年版) (8)要劑數種を載せ

(元禄五年版) ⑩丸散練藥數品の名方
(享保三年版) (9)丸散練藥の名方

(元禄五年版) ⑪日用調菜の食性能毒并針灸の要穴を

(享保三年版) (10) 日用調菜の食性能毒及び針灸の要穴

(元禄五年版) (12) に至るまでくはしく是を記せるものなり誠に手裏小冊の中に許多の至宝を秘蔵せり

(享保三年版) (11) にいたるまで悉くこれを記せり誠に手裏小冊の中に許多の至宝を秘蔵し

以上を見てもわかるとおり、元禄五年版の②③以外は、享保版は元禄版の序文に使われた語をその順番どおりに抜書きして文をつなげていることがわかる。「傍邊の素生」「手裏小冊の中に許多の至宝を秘蔵せり」といった独特な言い回しをそのまま踏襲するなど、享保三年版の参考文中の括弧内に、元禄五年版の序文をすべて盛り込んでしまっている。享保版の括弧内はそのほとんどが元禄版の語句を使用しているのである。享保版独自の文とみることができるのは「ここに醫道重宝記は片郷の庸醫あるひは醫道に志ある俗家のために古人此書を著す」の部分である。享保版序文中の(2)「古人此書を著す」とは、改刻本を出すときの元となった元禄五年版であると推定される。

(元禄五年版) 非家の初心のために

(享保三年版) 醫道に志ある俗家のために

この部分は元禄版を享保版が同義の文節にわざわざ改変したものである。享保版を作った当時、この語句に享保版の序者が違和感を感じたの

覚えたのか、または元にした元禄版に虫食い等の故障が本自体にあったのか、言語レベルの問題なのか、書誌レベルの問題なのか見当がつかないが、なんらかの問題がこの部分に見られたためであると考えられる。

四 結論

近世出版文化において「重宝記」という集合は、何かの共通する意味でくくっていたのなら、その意味は何であり、当時の人は何と自覚していたのか。このことを考えるための一つの方法として、今回は重宝記の序文を中心に論じてみた。まず、序文を持たない重宝記は、その体裁の都合上、または改刻などが行なわれたときに板元のなんらかの都合などで割愛されたものであると考えられる。すると重宝記にとって序文とは、例えていうなら重宝記の「剰余」の部分であるとも考えられる。その剰余の部分に作者なり板元なりによって書き加えられたのが序文なのではないだろうか。序文を並べてみると序文の記述内容は、ほぼその重宝記の内容について言及していると言って良いと思われる。そこで重宝記が「主題別」にまとめられた日用的知識を集めた辞典、日用類書であることを考えれば、序文においてその重宝記の趣旨を説明するということは自然、その重宝記の主題について言及することになり、また、重宝記の主題はそのまま書名となるために、書名の紹介・説明も序文において行なう事が可能になっているのである。ここに、序文の重要性が生じた。序文を一瞥するだけで、書名、主題、作者・板元の意図や趣旨を知る事ができるのである。これらすべてが盛り込まれている序文に、序者たちは細心の注意を払ったのであろう。『医道日用重宝記』の改

刻本において、序文を改めながらも、原本の序文の語句を多用したのは、『医道日用重宝記』の改刻本であることを読者に示す意図もあつたのではなからうか。

従来、「重宝記」という言葉は「役に立つ書」という程度の意味なのだろう、と考えられてきた。しかし、多くの重宝記序文に見られる定型語ともいえる「世の重宝」という語に、「世の宝となる書」という気概を持つて重宝記を企画し世に送り出そうとする意識を見る必要が出てきた。また、「重宝」という語を考える上でもう一つ大切なのが『大学』に所収されていた王孫圉の「楚国はもつて宝と為す無し、惟だ善をもつて宝と為す」という言葉である。その言葉を序文に引いた『女重宝記』や、そして『女重宝記』序文に影響を受けて作られたと考えられる『永代重宝記』序文があつた。この二つの重宝記は『大学』の王孫圉のこの言葉に独自の解釈をつけ、「重宝記」という語に「人として最も重要な宝(善・道)の書」という意義を持たせた。重宝記の祖といわれる『家内重宝記』が刊行されてから、わずか五年あまりで「重宝記」という語の持つ感覚は序文の中でここまで発展し、また大義を得ていったのである。多種の重宝記(現時点で八十種の重宝記を確認)が刊行され続けるのは、このような「大義」を得たことも一因としてあるのではないだろうか。

(おの・さやか 本研究科博士後期課程)

注

- 1 元禄五(一六九二) 年刊
- 2 宝暦六(一七五六) 年刊
- 3 元禄十(一六九七) 年刊
- 4 文化六(一八〇九) 年刊

⁵ 寛政十(一七九八) 年刊、東京都立中央図書館所蔵、國東治兵衛作、靖中菴桃溪画、大坂 大野木市兵衛・海部屋勘兵衛板

※加藤安雄氏による改題と翻刻が『庶民生活資料集成』「紙漉重宝記」に出ている。その中の「紙漉重宝記 解題」にこの重宝記の特徴と詳しい説明がある。その中で加藤氏は「本書は和紙文献として代表的なものであり、ことに簡明な製紙技術書として貴重なものである」として、この重宝記が大正十四(一九二五)年に東京三省堂から、昭和十七年に大阪紙業出版社から複製本がでたことを述べている。さらに、ヨーロッパにおける日本紙の愛好と評価が高まるにつれ、この重宝記は欧州でも注目をあつめたことも次のように述べている。「……たちまちドイツにおいて復刻本が出来、つづいてドイツ語版、スペイン語版、フランス語版が出版され、ますますこの書は世界的になった」とあり、ドイツ語版は昭和二年刊行、スペイン語版は昭和二十七年刊行、フランス語版は昭和二十五年刊行ということである。

⁶ 安永五(一七七六) 年刊

⁷ 明和九(一七七二) 年刊、日野友松作、丁子屋九郎右衛門板

⁸ 文化三(一八〇六) 年刊、京須原屋茂兵衛他板

⁹ 明治十九(一八八六) 年刊、徳野嘉七作

¹⁰ 正徳四(一七一四) 年刊

¹¹ 延享二(一七四五) 年刊、高志鳳翼作

¹² 延享三(一七四六) 年刊、大坂柏原與市板

¹³ 安政四(一八五七) 年刊

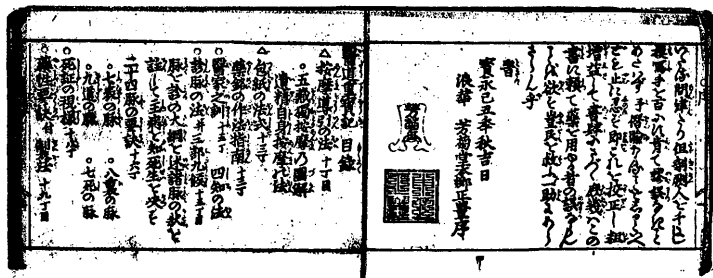
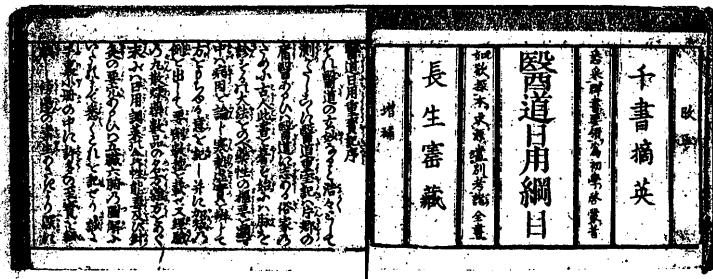
¹⁴ 作者、板元、刊年ともに未詳

¹⁵ 元禄八年版序文。このほかに永代重宝記は、天明七年版、宝暦十年版(未見)などの改刻本がある。天明七年版は、元禄八年版の改刻である。内容はそのままであるが、口絵、序文などが大きく変化している。(天明七年版序文は摺りが悪く、不鮮明なため、判読不能)

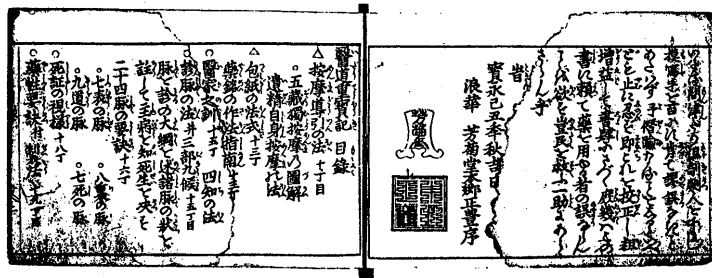
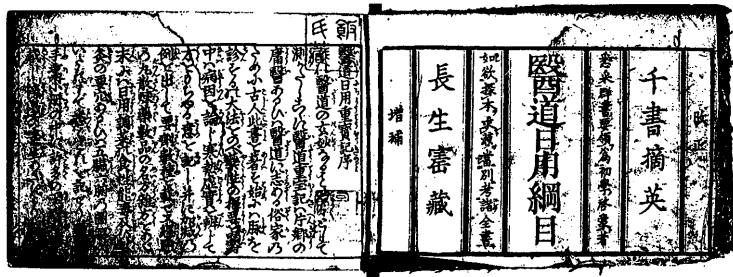
¹⁶ 『大学』宇野哲人著、講談社、二〇〇三年より

¹⁷ 実際は木曜日である。

i (文政元年版) 見返し・序・目録



ii (寛政十二年版) 見返し・序・目録



iii (慶応四年版) 見返し・序なし・目録

